

体育科教育法入門

宇土 正彦 編著



大修館書店

体育科教育法入門

——宇土正彦 編著——

大修館書店

体育科教育法入門

© M. Udo 1983

昭和58年3月1日 初版発行
昭和59年6月15日 再版発行

定価2000円

検 印
省 略

編著者 宇 土 正 彦
発行者 鈴 木 敏 夫

発行所 株式会社 大修館書店

〒101 東京都千代田区神田錦町3丁目24番
電話東京(294)2221(代)振替東京9-40504

印刷・製本／図書印刷 装幀／近藤敬三

ISBN 4-469-26087-8

Printed in Japan

ま え が き

体育の学習指導(授業)の考え方が大きく転換しはじめた、という声が聞かれるようになってから、すでにかかなりの日時が刻まれたように思う。そして、考え方の変化だけでなく、具体的な授業の進め方も、その新しい考え方にそって試みられるようになり、たしかにこれまでとはちがった様相には新鮮さを感じさせられるものがある。具体的に、転換する体育の学習指導が動きはじめている、ということである。

本書は、この転換する体育の学習指導に関して、基本的な考え方をいろいろな面から攻め、新しい部分、改めなければならない部分、なお保持しなければならないことがらを論じてみようとした。前半の第Ⅰ部がそれである。

その第Ⅰ部に対し、第Ⅱ部では、具体的な授業の進め方について、広く各種運動をとりあげながら、転換する体育をどのように具現するか、それぞれの種目に特徴的な側面をどのようにとらえるのか、そこに焦点をおきながら、具体的な扱い方を示そうとしたものである。

第Ⅰ部についてもまた第Ⅱ部に関しても、それぞれ多くの専門家、研究者に分担執筆をお願いしたわけであるが、特に執筆に当たっては、経験の浅い教師でも、さらには、学生諸君であっても、じゅうぶんに理解され、問い直しも試みられるようお願いした。いわゆる入門書として企画したからである。この趣旨を了とされ、ご協力をいただいたそれぞれの執筆者各位(別記)に、ここで深く感謝したいと思う。

でき上がってみると、率直にいった後日手を加えたい部分があるのも否定できない。執筆者の中にも、はやい機会に手直したい部分もあるという希望をされた方々もある。特に若い人びとに多く利用されることを願っているが、今後さらに検討を加え、できるだけはやい機会に、よりよい入門書を目ざして手を加えたいと思う。そのため、読者

各位のご批正もぜひいただきたいところである。

なお、本書を世におくり出すことができたのは、編集上いろいろな面に亘ってお力添えをいただいた、高島稔（東京女子体育大学教授）、嘉戸脩（東京学芸大学教授）の両氏の御盡力によるところが大きい。また、それは大修館書店の体育書にむけられた熱意によってもいるが、特に、高野整氏、加藤順氏のご盡力に対して謝意を表したい。

昭和58年1月24日

宇 土 正 彦

目次

第Ⅰ部 体育科教育法の基礎

●第1章 体育と体育科教育

- | | |
|-------------------------------|------------------------|
| 1. 体育・体育科教育の概念と性格……………2 | ②体育科・体育科教育の性格 5 |
| (1) 体育の概念……………3 | 2. 体育の授業……………6 |
| ①からだの教育 3 | (1) 三つの基本的な構成要素……………7 |
| ②運動による教育 3 | (2) 体育で特に付加される要素……………8 |
| ③運動の教育 3 | (3) 今後の課題……………9 |
| ④まとめ 4 | 3. 体育科教育と教師の役割……………10 |
| (2) 体育科・体育科教育の概念と
性格……………4 | (1) 教師の役割……………10 |
| ①体育と体育科と体育科教育 4 | (2) 望まれる教師の特質……………11 |

●第2章 これからの社会と体育

- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 1. 体育と社会変化……………13 | ②生涯スポーツと体育 20 |
| (1) 人と運動のかかわり……………13 | 2. 学習者と体育……………21 |
| ①必要としての運動 14 | (1) 児童・生徒のからだと運動……………21 |
| ②欲求としての運動 16 | ①小学校段階 21 |
| (2) これまでの社会と体育……………17 | ②中学校段階 23 |
| ①戦前の社会と体育 17 | ③高校段階 23 |
| ②戦後の社会と体育 17 | (2) 児童・生徒のこころと運動……………24 |
| (3) これからの社会と体育……………19 | ①小学校段階 24 |
| ①現在および未来社会と
運動の意味 19 | ②中学校段階 25 |
| | ③高校段階 26 |

●第3章 体育の目標と内容

- | | |
|---------------------------------|-------------------------|
| 1. 体育の目標……………28 | の教科・科目「体育」の目標……………29 |
| (1) 教科「体育」の性格と目標の
考え方……………28 | ①小学校体育科の目標 30 |
| ①教科「体育」の性格 28 | ②中学校保健体育科体育分野の
目標 30 |
| ②目標の二つの側面 29 | ③高等学校保健体育科体育の目標 30 |
| (2) 小学校・中学校および高等学校 | 2. 体育の内容……………31 |

ii 目次

(1) 運動の分類と特性	31	(1) ホイジंगाとカイヨワの遊び論と運動の楽しさ	41
①体操 31		(2) 運動の楽しさをささえる条件	42
②スポーツ 32		(3) 楽しさからの運動の分類	44
③ダンス 33		(4) 楽しさの発展モデル——チクセン トミハイの楽しさの発展的モデルか ら——46	
(2) 運動技術の構造	34	(5)運動の楽しさの教育的な意味	47
①運動の特性と技術構造 34		①生涯スポーツへつながる運動への 自発的・自主的態度の育成 47	
②運動の形態と運動技術 35		②からだと心を鍛えるはたらき 47	
③運動技術と調整力・運動技能 35		5. 体育における学力問題	48
④運動技術と内容 35		(1) 学力(achievement)の意味	48
(3) 行動のしかたや態度と知識理解 36		(2) 学力の構造	49
①行動のしかたや態度 36		(3) 体育における学力問題	50
②知識 37		①これまでの経過 50	
3. 体育と体力問題	38	②これからの体育における学力探究 の課題 51	
(1) 体力の概念	38		
(2) 目標・内容と体力	39		
(3) 運動処方	40		
4. 運動と楽しさ	40		

●第4章 体育の学習

1. 学習および学習のねらい, 学習内容, 学習過程	54	①機能的な特性に基づく運動の分類 63	
(1) 学習とは	54	②子どもから見た特性と学習過程 64	
(2) 学習のねらい	56	③楽しさの発展モデルと学習過程 65	
(3) 学習内容	57	④機能的特性から見た運動の類型と 学習過程のモデル 66	
(4) 学習過程	58	3. 体育の学習をめぐるその他の問題	71
(5) 学習活動	60	(1) 個人差, 性差の問題と体育の学習71	
2. 運動の学習過程	60	(2) 運動嫌いと体育の学習	72
(1) 運動の効果的な特性と学習過程 61		(3) 動機づけと体育の学習	74
(2) 運動の構造的な特性と学習過程 62			
(3) 運動の機能的な特性と学習過程 63			

●第5章 体育の学習(指導)の形態

● 学習(指導)形態のとらえ方とそ の系譜	76	(2) グループ学習と系統学習	79
1. 体育の学習形態における二つの考え方...77		2. 学習組織の観点からの学習形態	79
(1) 問題解決学習と系統学習	78	(1) 個別学習(指導)の位置づけ	80
		(2) 一斉学習(一斉指導)	81

- (3) 班別学習(班別指導)82
- (4) 班別指導の一つの形態としての能力別指導(学習)83
- (5) グループ学習(小集団学習)85
3. 学習形態についてのまとめ87

●第6章 体育の学習指導過程

- 学習指導過程のとりえ方 88
1. 単元に入る前に教師としてやることから89
- (1) 授業の基本構想ねり89
- ①ねるべき主なことから 89
- ②運動の特性把握からの導き出し 90
- (2) 条件整備92
- (3) グループノートと参考資料の用意93
2. 導入(はじめ)の段階93
- (1) オリエンテーション93
- (2) はじめのゲームへの導入98
- (3) はじめのゲーム99
3. 展開(なか)の段階100
- (1) ゲームの質的發展と学習内容100
- (2) 学習内容の決め出しと教師のかかわり方101
- (3) ゲームとのフィードバック103
- (4) グループ独自の活動への移行104
- (5) 具体的な練習方法105
4. 整理(まとめ)の段階106

●第7章 体育の指導計画

- 計画をめぐる基本的な考え方
——指導計画の意義・機能——109
- ①授業と計画 109
- ②指導計画の機能——計画のサイクル—— 110
- ③指導計画のコース 110
1. 体育の年間計画112
- (1) 年間計画の意義・機能112
- (2) 年間計画の作成手順112
- ①学習指導要領と各学校の実態との関係 113
- ②自校の体育目標の設定 113
- ③年間総授業時数の決定 114
- ④指導内容の決定 115
- ⑤領域別授業時数の決定 115
- ⑥単元の構成 115
- ⑦授業担当のしかたの決定 116
- ⑧年間計画の形式の決定 117
- ⑨単元の配列 117
2. 体育の単元計画119
- (1) 単元計画の意義・機能119
- (2) 単元計画の内容119
- ①単元のねらい(目標)を明確におさえる 119
- ②学習内容を具体的にあげ、学習の道筋を立てる 120
- ③施設・用具の条件や、グルーピングを明らかにする 121
- ④単元の展開を表にまとめる 121
- (3) 単元計画の形式122
3. 体育の指導案(時間計画)122
- (1) 学習指導案の意義・機能122
- (2) 学習指導案の内容123
- ①単元における本時の位置を明らかにする 123
- ②授業の条件を明らかにする 124
- ③本時の目標・内容を示す 124
- ④1時間としてのまとまりをつくる 124
- ⑤学習活動を具体的に示す 124

⑥メモ欄，講評欄を用意する 124

●第8章 体育の評価

- | | |
|--|--|
| 1. 教育(体育)評価とは……………126 | 人内評価……………135 |
| (1) 基本観点……………126 | (2) 学習のねらい・到達度評価の基準の設定は楽しい体育のキイ……………136 |
| (2) 教育(体育)評価の概念……………127 | (3) 的はずれな到達度評価を行って
はならない……………137 |
| (3) 教育評価の意義……………128 | |
| 2. 教育(体育)評価に関する基礎概念の理解
……………129 | 4. 楽しい体育学習の評価の観点・内容・方法
について……………138 |
| (1) 絶対評価と相対評価……………129 | ①評価内容を導き出すための運動
の一般的特性カテゴリー 138 |
| (2) 診断的評価，形成的評価，総括
的評価……………130 | ②楽しい体育学習の評価の観点と
内容のとらえ方——学習過程の
評価を重視する—— 138 |
| (3) 到達度評価——働きとしての形
成的評価——……………131 | ③各運動領域の学習評価の内容を
決め出すための類型一覧 141 |
| (4) 教科体育(授業)の構造からみた
各種評価の位置……………133 | ④運動技能，態度・マナーの評価
をめぐる 141 |
| 3. 新たな体育への指向と到達度評価——楽
しい体育表現への評価の重視——……………134 | ⑤学習評価の活用に関して 142 |
| (1) 学習すること自体を楽しむ体育
に重要な到達度・形成的評価や個 | |

●第9章 体育科教育におけるその他の問題

- | | |
|----------------------------------|---------------------------|
| 1. 体育と施設用具……………143 | 3. 体育の授業研究……………153 |
| (1) 学習指導における施設用具の考
え方……………143 | (1) 授業研究の課題……………153 |
| ①体育施設の概念 143 | ①基本的な研究課題 153 |
| ②学習指導における施設用具のは
たらき 144 | ②学習指導をめぐる研究課題 154 |
| (2) 学校体育施設の整備の考え方……………145 | ③指導性や自主性をめぐる研究課
題 155 |
| ①施設用具の種類・規格の問題 146 | ④活動内容をめぐる研究課題 155 |
| ②施設用具の数量の問題 146 | ⑤学習環境をめぐる研究課題 156 |
| ③施設用具の配置・構成の問題 148 | (2) 授業研究の方法……………157 |
| 2. 体育授業における教育機器の活用……………149 | ①授業の水準と研究方法 157 |
| (1) 教育機器と体育授業……………149 | ②学習指導案による研究方法 158 |
| (2) 教育機器導入の観点……………150 | ③その他の研究方法 159 |
| (3) 体育授業システムと教育機器……………150 | (3) 授業分析の方法……………159 |
| (4) 教育機器の特徴と活用……………152 | ●代表的な授業分析法のアウトラ
イン 162 |

4. 障害児のための体育……………167	(2) 運動教育と幼児の体育……………176
●はじめに 167	6. 選択制体育の問題……………179
(1) 障害者の現状……………168	(1) 選択制体育とその意義……………179
(2) 障害とは何か、発達との関連は 169	(2) 選択制体育の基本的性格とその 限界……………180
(3) 障害児のための体育……………171	(3) コース設定(種目編成)の考え 方……………181
①歴史 171	(4) 選択制導入の手順……………182
②現状 171	●選択制をめぐるその他の問題 184
③障害児体育の課題 171	
5. 幼児のための体育……………173	
(1) 体育科教育と幼児の体育……………173	

第Ⅱ部 各運動領域の学習指導

●第1章 体操の学習指導

(1) 体操の特性……………186	へ 190
(2) 体操のねらいと内容……………186	②理論学習との融合 190
①基本的なねらいと内容 186	③体操の学習成績のとりえ方 191
②小・中・高別のねらいと内容 187	(5) 体操におけるつまずきとその指 導……………191
(3) 体操の学習過程……………188	①自己理解におけるつまずき 191
(4) 体操の授業の要点……………190	②変化・発展のさせ方(負荷のか け方)におけるつまずき 192
①「教師が学習者を鍛える授業」か ら「学習を指導するという授業」	

●第2章 個人的スポーツの学習指導

① 陸上運動・陸上競技

(1) 陸上運動(競技)の特性……………194	(4) 陸上運動(競技)の授業の要点…201
(2) 陸上運動(競技)のねらいと内 容……………195	(5) 陸上運動(競技)におけるつまず きとその指導……………203
(3) 陸上運動(競技)の学習過程……………198	

② 器械運動

(1) 器械運動の特性……………205	(4) 器械運動の授業の要点……………218
(2) 器械運動のねらいと内容……………206	(5) 器械運動におけるつまずきとそ の指導……………220
(3) 器械運動の学習過程……………214	

③ 水泳

(1) 水泳の特性……………223	(3) 水泳の学習過程……………227
(2) 水泳のねらいと内容……………225	(4) 水泳の授業の要点……………228

●第3章 対人的スポーツの学習指導

① 剣道

- | | |
|-----------------------|-----------------------------|
| (1) 剣道の特性……………231 | (4) 剣道の授業の要点……………238 |
| (2) 剣道のねらいと内容……………234 | (5) 剣道におけるつまずきとその指導……………241 |
| (3) 剣道の学習過程……………236 | |

② 柔道

- | | |
|-----------------------|-----------------------------|
| (1) 柔道の特性……………243 | (4) 柔道の授業の要点……………248 |
| (2) 柔道のねらいと内容……………244 | (5) 柔道におけるつまずきとその指導……………249 |
| (3) 柔道の学習過程……………246 | |

●第4章 集団的スポーツの学習指導

① バスケットボール

- | | |
|-----------------------------|----------------------------|
| (1) バスケットボールの特性……………251 | (4) バスケットボールの授業の要点……………256 |
| (2) バスケットボールのねらいと内容……………252 | (5) 指導上のポイント……………258 |
| (3) バスケットボールの学習過程……………253 | |

② バレーボール

- | | |
|---------------------------|---------------------------------|
| (1) バレーボールの特性……………260 | (4) バレーボールの授業の要点……………265 |
| (2) バレーボールのねらいと内容……………262 | (5) バレーボールにおけるつまずきとその指導……………267 |
| (3) バレーボールの学習過程……………264 | |

③ サッカー

- | | |
|-------------------------|-------------------------------|
| (1) サッカーの特性……………270 | (4) サッカーの授業の要点……………275 |
| (2) サッカーのねらいと内容……………272 | (5) サッカーにおけるつまずきとその指導……………277 |
| (3) サッカーの学習過程……………273 | |

④ ハンドボール

- | | |
|---------------------------|---------------------------------|
| (1) ハンドボールの特性……………279 | (4) ハンドボールの授業の要点……………282 |
| (2) ハンドボールのねらいと内容……………280 | (5) ハンドボールにおけるつまずきとその指導……………284 |
| (3) ハンドボールの学習過程……………281 | |

⑤ ラグビー

- | | |
|-------------------------|------------------------|
| (1) ラグビーの特性……………286 | (3) ラグビーの学習過程……………291 |
| (2) ラグビーのねらいと内容……………286 | (4) ラグビーの授業の要点……………293 |

●第5章 表現運動・ダンスの学習指導

- | | |
|-------------------------|-----------------------------|
| (1) 表現運動・ダンスの特性……………296 | (2) 表現運動・ダンスのねらいと内容……………299 |
|-------------------------|-----------------------------|

(3) 表現運動・ダンスの学習過程…300	(5) 表現運動・ダンスにおけるつま
(4) 表現運動・ダンスの授業の要点 301	ずきとその指導……………304

●第6章 基本の運動・ゲームの学習指導

(1) 基本の運動・ゲームの特性……306	(4) 基本の運動・ゲームの授業の要
(2) 基本の運動・ゲームのねらいと	点……………317
内容……………310	(5) 基本の運動・ゲームにおけるつ
(3) 基本の運動・ゲームの学習過程	まずきとその指導……………323
……………314	

付 録

① 教育実習の心得……………327
② 小・中・高学習指導要領(抄)……………332
●研究を深めるための参考図書 343

第 I 部

体育科教育法の基礎

第 1 章 体育と体育科教育	2
第 2 章 これからの社会と体育	13
第 3 章 体育の目標と内容	28
第 4 章 体育の学習	53
第 5 章 体育の学習(指導)の形態	76
第 6 章 体育の学習指導過程	88
第 7 章 体育の指導計画	109
第 8 章 体育の評価	126
第 9 章 体育科教育における その他の問題	143

第 1 章

体育と体育科教育

〈本章で学ぶことがら〉

- ① 体育や体育科教育という言葉の意味はどんなことか。「体育科」という教科は、基本的にいったいどんな性格をもっているか。
- ② 体育の授業は、どんなしくみ（構造）としてとらえることができるか。体育の授業は、運動の学習を指導することか、児童生徒に運動を行わせることか。
- ③ 体育科教育の中で、教師はどんな役割を果たさなければならないか。そのために、教師はどんな専門的な教養を要求され、どんな指導力を期待されているのか。

1. 体育・体育科教育の概念と性格

体育という言葉は、意外なほど漠然と使われることが多い。教育の専門家である教師、ときには教育の学者や行政に従事している人の中にさえも不適当な理解を示している例がみられるほどである。体育の概念はこれまでにかなりの変化もみられるし、体育科教育という用語もまだ新しいので、やむを得ない事情もある。しかし、これからの社会が要求する体育問題はますます重要性を包含する可能性が増大するにちがいないと思われるので、体育や体育科¹⁾あるいは体育科教育の概念や性格についてもじゅうぶんな理解や問題意識をもつよう

1) 中学校・高校では「保健体育科」としなければならないが、本書では便宜上、その中の分野（中学校）、科目（高校）としての「体育」を特に「体育科」と呼ぶことにする。

にしておきたいものである。

(1) 体育の概念

① からだの教育

体育の意味を、からだの健康を維持したり、体力を高めたり、からだの発育・発達を促進したりすること、つまりは「からだの教育」とする考え方があ
る。学習指導要領の変遷に眼を向けてもすぐわかるが、専門家の間でもつい最
近まで、そのように考え、衛生も含めて体育としたのであった²⁾。

今日でも、知育・徳育・体育というように呼んで心身ともに健康で豊かな人
間性を育成しようと強調する向きがあるが、この場合の体育もほぼからだの教
育を意味していることが推量される³⁾。また、今なお、しかも教師の間で「体
育」が「タイソウ(体操)」と呼ばれている例⁴⁾が絶えていないのをみても、「か
らだの教育」とされた歴史の重みや長さが伺い知られる。

② 運動による教育

体育とは「からだを通しての教育」という定義のしかたも新しくみられるよ
うになったが、より多くは「運動による教育」と呼ばれることが今日までつづ
いてきた。「からだの教育」よりもいっそう広く全人的な発達をめざし、その
手段として運動を位置づける考え方である。

この考え方は、いわゆる戦後のわが国の学校体育をこれまで特徴づけてきた
もので、発達期にある児童生徒の身体的発達のみならず、知的にも社会的にも
その発達(全人的)を促進するようにめざしたのである。「からだの教育」とい
う教育目的の中の一部を分担する立場から一転して、「運動」を手段とするこ
ろに教育の中の特徴づけを行った、ということになる。体育に関するこの定
義は、当然のことながら、体育の授業にも大きく影響をもたらしてきた⁵⁾。

③ 運動の教育

2) 「体育は運動と衛生の実践を通して人間性の発展を企図する教育である」(学校体育指導要綱、昭和22年)。このほかなお昭和24年の学習指導要領でもまだ明確な両者の区別はなされてい
ない(→詳しくは、松田・宇土：体育科教育法、大修館書店、昭和53年参照のこと)

3) 古く心身二元論をもとにした「知育・徳育・体育」論があった。

4) 特に「からだの教育」というよりも、別の意識が働いていわれることもよくある。

5) その具体的なことがらは、第I部の第2章以下によって理解されよう。

「運動による教育」とされた体育のときも、具体的な体育の授業になると、運動を通して人間形成を、という体育の概念がそのまま生きるようにつねに実践されたわけではない。時により教師によっては、単に一定の運動技能を習得させることで精一杯、あるいはそれで事足りりとするケースもあった。しかし、だからと言って、それをもって、ここでいう「運動の教育」がすでに展開されていた、ということにはならない。

ここで特に新しくとりあげた「運動の教育」というのは、明らかに生涯スポーツ⁶⁾、みんなのスポーツ⁷⁾へつなぐことを意図して、誰でもがめいめいの力に応じて運動に親しむことができるように、人の運動とのかかわりを学ばせ、運動が内包している独特の楽しさや喜びを体験的にわからせようという考え方のものである。ここでは、体育の概念構成の上でそれまで「手段」の位置におかれていた運動が「目的～内容」に移されたことを意味している。

④ まとめ

以上三つの視点をとりあげて、体育の考え方の変化をたどり、そこから体育の概念のおさえ方を導き出してみた。全体を概観してその要点を挙げてみると、つぎのようになろう。

- ◇ 教育の概念の範囲のなかにあり、教育の一部となっていること。
- ◇ 運動（実践活動としての）が重要な要素を占めており、その位置づけにみられる変化に重要な意味があること。
- ◇ 社会の変動が特に大きく影響を及ぼしていること。

（2）体育科・体育科教育の概念と性格

体育と体育科とは同じ概念であるように扱われることが多く、またそれで特に支障を生ずることはないようにもみえる。しかし、果たしてそれでよいか、また、体育科および体育科教育の性格についてもここであわせて若干の検討を加えておきたいと思う。

① 体育と体育科と体育科教育

体育科教育は、教科としての体育を意味するものとして扱われることが多い。しかし、教育課程の中の運動（例えば、必修として多くの学校がとりいれている各種

6)7) ともに広い意味のもので、運動と言いかえてもよい。

運動のクラブ活動はその典型例の一つ)を含めて、広くその対象を考慮する考え方もかなり多い。(本書では、前者の立場をとった。)

ところで、体育科教育の内容をみると、小学校(高学年)で保健が、中学校で体育に関する知識、高校で体育理論が含まれている。体育の概念で論じられている運動は、実践活動を基本的な要素としているので、この点に着目しただけでも、体育と体育科教育とは同じ概念とすることは不適當である。体育科教育とは、体育それ自体を中心に大きく含みながらも、その目的をいっそう効果的に達成する上で関連深い学習活動(ここで挙げた例では、他の多くの教科と同じような知的活動——知識・理論の学習)を別途に加えたものとなる。

〈問題〉

体育それ自体がすでに教育の概念の中にあるのに、さらに体育科教育——ときに体育教育とされることもある——とするのは、まさに“教育”の重複になるので、用語としては不適當ではないか。

体育それ自体と教科(あるいは教育課題)の中の体育との区別を認識しながらも、その後者を問題にする体育科教育(法)の用語には疑問が残るであろう。これまでに「特別教育活動」と呼ばれていたのが「特別活動」に変えられた例があるが、その意味でも、「体育科」あるいはそれを研究対象とする「体育科教育法」「体育科教育学(体育教育学)」の如きは、もっと適当な術語に改められるほうが望ましい。

西ドイツにみられる教科名の改変(体育からスポーツへ)は、わが国でもよく知られている例である。これはここで問題にしている視点からよりも、もっと基本的にスポーツの教育を重視する立場からの改変ではあるが、ここでも有力な方向を示唆しているものとして参考にできよう。

しかしながら「体育科」という教科の名称もかなり定着していることもあり、また、教科の問題を扱う教育法や体育学も教科の名称をそれぞれとりあげて呼ぶのが通例であるので、現状では、「体育科」「体育科教育法」と呼ばれている。

② 体育科・体育科教育の性格

体育科を技能教科として特徴づける考え方は、これまで体育科や体育科教育の性格を最も強く印象づけてきた部分となっていよう。体育の学習成績がほとんど「運動のじょうずへた」であらわされ、また一般の人びとの間でもそれ